被災地・石巻支援ボランティア報告記

2011年10月23日(日)
日本共産党・板倉真也

３月11日の「東日本大震災」から７カ月を迎えようとしている10月８日(土)～10日(月)の３日間、私は共産党の要請に応えて、共産党が現地にボランティアセンターを構えている宮城県石巻市に出かけました。石巻市は仙台市から東へ、三陸自動車道を車で１時間20分ほど走った港町で、人口は16万人を数える漁業の盛んな町です。震災から７カ月。被災地・石巻市はいま、どのような状態になっているのかを、３日間のボランティア報告を兼ねて紹介します。

石巻市の被害状況 (石巻市と総務省統計局のホームページから)

■石巻市は震度６強

人 口	世帯	面積	可住地面積
160,826	57,871	556㎢	242㎢

死 者	行方不明
3,273	706

住宅の被害状況(棟)		
全壊家屋	半壊家屋	一部損壊
19,360	3,949	9,466

推定浸水範囲 73㎢	
人口比	世帯比
69.9%	72.9%

※人口・世帯は2011年９月16日時点
※被害状況は2011年10月12日時点

石巻市と牡鹿半島の地図

■石巻市の仮設住宅状況

仮設住宅団地数	131団地
建設計画戸数	7,297戸
完成戸数	7,279戸
入居戸数	5,965戸

仮設住宅着工開始　３月28日
131箇所目の着工開始　８月12日

残18戸の完成予定　10月13日

※避難所は10月11日で閉鎖

大震災の人的被害(警察庁まとめ)	
死者 15,825人	行方不明 3,819人

(10月19日現在)

100人以上の犠牲者があった自治体調べ　(　　)＝自治体人口に占める割合

	死者・行方不明	浸水人口		死者・行方不明	浸水人口		死者・行方不明	浸水人口
岩手県	6,348人(0.48%)	39.2%	宮城県	11,582人(0.49%)	27.5%	福島県	1,960人(0.10%)	13.5%
宮古市	542人(0.91%)	30.9%	仙台市	730人(0.07%)	2.9%	いわき市	347人(0.10%)	9.5%
大船渡市	452人(1.11%)	46.8%	石巻市	3,979人(2.47%)	69.9%	相馬市	459人(1.21%)	27.6%
陸前高田市	1,951人(8.37%)	71,4%	気仙沼市	1,405人(1.91%)	54.9%	南相馬市	663人(0.94%)	18.9%
釜石市	1,091人(2.76%)	33.3%	名取市	984人(1.35%)	16.6%	浪江町	184人(0.88%)	16.1%
大槌町	1,397人(9.15%)	78.0%	多賀城市	189人(0.30%)	27.2%	新地町	110人(1.34%)	56.8%
山田町	823人(4.42%)	61,3%	岩沼市	184人(0.42%)	18.2%			
			東松島市	1,145人(2.67%)	79.3%			
			亘理町	270人(0.77%)	40.4%			
			山元町	692人(4.14%)	53.8%			
			女川町	963人(9.58%)	80.1%			
			南三陸町	901人(5.17%)	82.5%			

総務省統計局のホームページから

石巻市までの経路

■「仙台駅」から「石巻駅」までの鉄道は一部区間、開通していない

「仙台」から「石巻」まではＪＲ「仙石線」が走っているが、「松島海岸」駅から「矢本」駅の区間は復旧していない。そのため、復旧していない区間はＪＲの代行バスが走っている(松島海岸⇨矢本 47分)。

■板倉真也は「仙台駅」から「高速バス」を利用

▷東京駅から「東北新幹線」で「仙台」下車。駅前から「高速バス」でＪＲ「石巻」まで直行。
(はやぶさ号で１時間36分、やまびこ号でも２時間)　(渋滞しなければ１時間20分・800円)
※小金井から自動車の場合は、平均で７時間。渋滞などがあれば８時間は覚悟。

武蔵小金井駅　８時発
⇩
石巻駅　12時40分着

■現地の共産党ボランティアセンター

ＪＲ「石巻駅」

石巻市に設置された日本共産党のボランティアセンターは、ＪＲ「石巻駅」から徒歩20分。海岸からは逆方向のところで、見た目では震災の被害はうかがえず。しかし「旧北上川を遡上してきた津波が途中で周囲にあふれだし、このあたりも１m50cmくらい浸水した」という。

ボランティアセンターには、週末には東京や千葉、神奈川、埼玉の共産党ボランティアがやってくる。また、支援物資も各地から届く。ボランティアをどのように活用するかを考え、支援物資を倉庫にいったん納め、整理・仕分けを行ない、仮設住宅などに届けながら要望を聞くのが、ここの仕事。仮設住宅に届ける場合には事前に下見にでかけ、現地の方々の要望を把握しておくという。

3日間の板倉真也の作業内容

初日(8日)・晴れ

■倉庫での支援物資の整理

支援物資がトラックなどで運ばれてくると、ボランティアセンター近くに借りてある倉庫に物資を搬入。「衣料品」「日用雑貨」「布団・毛布類」「食料品」「電化製品」「その他」に分けて倉庫内に整理する。この日の夕方４時30分には、小金井市貫井北町にある共産党事務所を朝８時30分に出発した２トントラックが渋滞を通り抜けて、ようやく到着。支援物資を搬入する倉庫は、以前、生協の物流倉庫だったところ。中は広く、全国から寄せられた支援物資が所狭しと積まれていた。日暮れ前に作業を終了。

2日目(9日)・快晴

■石巻市郊外の仮設住宅へ支援物資の届け

朝８時30分、50名余のボランティアが現地の指揮者の説明を受ける(右の写真参照)。この日は車で10分ほどのところの仮設住宅に支援物資を届けに行く。この仮設住宅は「水押野球場」のグランドに建てられたもので、市のホームページによると、戸数126で、入居は114戸だという。６月13日に完成した仮設住宅である。支援物資を積んだ２トントラック・軽トラック含めた11台の車に分乗して水押野球場の仮設住宅に向かった。仮設住宅へ出かける直前に、朝４時に国分寺市を出発した国分寺市議会議員の幸野おさむ氏と岡部ひろあき氏が車で到着した。

午前10時、仮設住宅到着。共産党がこの地に支援物資を届けにきたのは、夏の盆前以来だという。バザー用品を並べ始めると、大きな手提げ袋を持った人たちが続々と並び始めた。小さい子どもたちは、仮設住宅がにぎやかになったことから、楽しそうに走り回っていた。

私は、中古自転車の担当となった。中古自転車は10台。しかし自転車を必要とする人が多いため、抽選で当選者を決めることとなった。抽選がまだ始まっていないにもかかわらず、自転車が欲しい人は中古自転車の前に来て、「これがいいな」などの言葉をかけていた。「私の自転車はパンクしているの」と言う人もいて、パンク修理のボランティアが必要なこともわかった。

抽選方法は、自転車希望の受付を行なった順番にクジを引き、クジにあたった人が自転車をもらえるというもの。しかし、クジにあたった順番に希望する自転車がもらえるわけではない。当たりクジの先に番号が記してあり、番号の若い順番に、希望する自転車をもらっていくという仕組みになっている。受付には24人が名前を記し、そのうち10人が当たることとなった。当たりクジの番号が若くない人は、自分の気に入った自転車が別の人に持っていかれるのを残念がっていた。一方、クジに当たらなかった人は寂しそうだった。

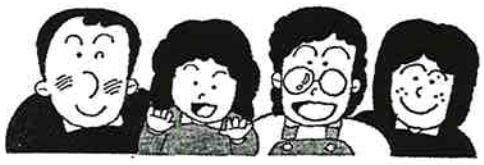
今回、用意した自転車は10台すべてが大人用。子ども用を求める声も多く、支援が求められる。東京とは異なり、津波被害で店舗も破壊されている。自動車を持たない人は、自転車がないと買物に行けないのである。

3日目(10日)・晴れ

■牡鹿半島の「小淵浜」地区の仮設住宅へ支援物資の届け

牡鹿半島の大部分も石巻市の範囲となっている。午前９時30分、支援物資を積み込んだ２トントラック２台含む12台が、牡鹿半島めざしてスタート。それに先立ち、炊き出し部隊がプロパンガスや食材を車に積み込んで出発している。炊き出し部隊含めると実に70名余の人数である。１時間かけて目的地の「小淵浜」の仮設住宅に到着した。
ブルーシートを敷きつめて、トラック２台に積み込んだ支援物資を並べる。「食料品」「日用雑貨」「食器類」「男性用衣類」「女性用衣類」「子ども用衣類」の順である。仮設住宅周辺にハンドマイク隊が「支援物資をお届けに来ました」と触れ込む。

仮設住宅入口に多くの人が列を成す。共産党がこの地に支援物資を持ち込んだのは、初めてのことだという。先に到着していた炊き出し部隊が煮物を用意。その隣りでは、別部隊の栃木県の青年達が、おでんの炊き出しを行なっていた。
支援物資の前に並んだ多くは、高齢者である。休日なので若者が車で出かけているのか、それともこれが実態なのかはわからない。前日の水押野球場の仮設住宅とは異なり、手提げ袋を持って来た人はほとんど見当たらない。察するに、このような形での支援を受けることが今までなかったのかもしれない。こちら側が用意した大きなビニール袋や段ボール箱に支援物資を次々に入れていた。
多くの人々は、最初の「食料品」「日用雑貨」のところで渋滞した。食料品は、じゃがいも、にんじん、米、ピーマン、さつまいも、レトルト食品である。数に限りがあるため、一人「５個」限定となっている。日用雑貨では、トイレットペーパーや紙おむつが次々に消えて行った。この集落一帯を見渡しても、店らしい建物はまったく見当たらない。政治はいったい、何をしているのか！。用意した毛布も数に限りがあるため、前日の自転車同様、抽選が行なわれた。これから晩秋、そして冬を迎える。仮設住宅の簡素なつくりを見ると、心が痛む。無料バザー開始前から長蛇の列をつくる高齢者の方々を見ていたら、涙が出てきた。



地震に遭遇

「小淵浜」仮設住宅で無料バザールをスタートした頃に、いきなり「ミシミシミシ」と地面が揺れた。後で聞くと「震度３」だという。牡鹿半島は地盤沈下が著しく、地盤が相当に緩んでいると思われる。震度３だというが、揺れ方は直下型で、もっと揺れたように思えた。不気味な揺れ方である。

被災地の惨状(見たまま)

■石巻駅前に立つだけでは被災状況は見えず

初日（８日）の午後０時40分、石巻駅前で高速バスから降り立った際には、「被災地という感じはしない」というのが第一印象。ところが駅から石巻港方面にわずか100mも行かない段階で、１階部分が壊れている建物がいくつも見え始める。港に近づくにつれ、その光景は激しさを増す。

■石巻港沿岸は壊滅状態

石巻港の沿岸部分は大部分の建物が崩壊し、建物の基礎部分だけが残る場所も多い。平地に建てられていた墓石は倒壊し、営業を再開している既存建物も、あちこちに傷跡を見せている。
海岸に近い場所には瓦礫や車両残骸が積み上げられ、“くさや”あるいは“ゴミ焼却場”を思わせる臭いが鼻を突く。あちらこちらにボランティア団体が後片付けに入っていた。右の写真は、津波で破壊された後に火災で黒こげになった小学校。手前は倒壊した墓石。このあたりは、学校と墓石が隣り合わせの所が多い。

■牡鹿半島は悲惨

牡鹿半島はリアス式海岸で、入り江が美しい。それゆえに平地部分が少なく、海からすぐに山肌にぶつかるという場所も多い。住民は、一定の平地がある場所に生活していた。そこを津波が直撃した。３月14日付の夕刊には次のような記事が掲載されている。「宮城県警は14日、宮城県の牡鹿半島の浜辺に約千人の遺体が打ち上げられているのが見つかったと明らかにした」。
石巻市から牡鹿半島の南端に行くには、半島西側の道路を車で走る。右側は海沿いの断崖、左側は山肌である。海側はところどころに陥没またはその恐れがあるということでロープが張られ、山肌側は山崩れで、これまたロープが張られて、片側一車線という場所がいたるところにある。アスファルトの道路も、海沿い側の陥没を想起させるように道路の流れに沿って亀裂が入り、段差もいたるところで生じている。「小淵浜」の仮設住宅に支援物資を運ぶ２トントラックは、亀裂や段差のある道路を左右に大きく揺られながら走っていく。現地でトラックの荷物トビラを開けると、見事なまでに荷崩れをしていた。

仮設住宅から目と鼻の先の海岸
海岸手前には瓦礫が積まれている

海岸沿いに入ると、破壊された建物がのきなみ目に映り、その光景が海岸沿いにどこまでも続く。「小淵浜」の仮設住宅が建てられている場所からわずか70mの

あたりまで、津波被害があった様子。こんな場所に仮設住宅を建てて大丈夫なのか？と思うのだが、他にまとまった敷地がないらしい。

■地盤沈下

今回の大震災では地盤沈下も起きた。石巻市の沿岸部では74cmの地盤沈下といわれ、満潮になると浸水する地帯が生まれる。２日目（９日）の夕方、沿岸部から市街に入る途中の河口に近い部分の平地が水浸しになっているのを目撃した。
一方、牡鹿半島の沿岸部は120cm余も沈下したという。右の写真を見てもらいたい。寄せ集めた「ブイ」を何気なく撮影したのだが、東京に戻って写真を見てみると、海の中に「電柱」が立っている。つまり地盤沈下のために、道路沿いに建てられていた電柱が、いまは海の中に存在する事態となった。震災前は、この場所に道路が走っていたのである。牡鹿半島は主要道路から離れた場所にあり、しかも道路が傷んでいる。「陸の孤島とされてしまうのではないかと懸念される。

ボランティアの宿泊と入浴・食事

■ボランティアは贅沢は言わない

「どんな所に泊まったの？」「食事や風呂は？」などを尋ねられることが多い。まずは宿泊所について。日本共産党のボランティアは、現地で共産党が借りている施設に寝泊まりする。私が宿泊したのは、石巻市のボランティアセンターから車で１時間ほどのところにある建物。以前はサウナ施設だったところで、男性が泊まる部屋と女性が泊まる部屋とに部屋が区分けされている。布団と毛布が用意され、各自が山積みされている布団・毛布を引っ張ってきて、自分の気に入った空間に敷きつめて寝るという具合。朝、起きたら、使った布団・毛布は、もとのあった場所に積み上げるようになる。ようするに、前夜に誰かが使ったモノを使用するということ。キレイ好きな人には、耐えられないかもしれない。朝は６時には起きなければならないので、前夜は10時には就寝となる。寝る前にはたいてい、グループごとに輪を囲み、酒を飲む。だから、みんな熟睡する。

食事と風呂は、別の場所となる。宿泊施設が以前はサウナだったとはいえ、いまは営業していないため活用できない。では、どこで風呂と食事をしたのか。
まず食事について。朝食は石巻市内の「吉野屋」に入った。朝からしっかりと牛丼を食べるのである。えっ?、なぜ「吉野屋」かって?。朝から開いている場所が、ここしかなかったからである。昼食は、各自がボランティアセンターの近場で食べる。市街地なので、食べるところはある。
夕食と風呂は、セットで済ませられる場所に行く。「行く」と言っても、ちと遠い。「石巻河南」インターから三陸自動車道を北上して「河北」インターで下り、「上品の郷（じょうぼんのさと）」という所に行く。風呂は温泉で500円、夕食は1,000円程度でまかなえる。ここで、一日の疲れを癒すのである。
宿泊場所の「サウナ施設」は、「河北」インターからさらに30分ほど北上して「登米」インターで下りる。インターから下りて10分ほど走ると、「サウナ施設」に到着する。ようするに、石巻市のボランティアセンターから宿泊場所まで１時間とはいうものの、三陸自動車道を走ったうえでの１時間であり、けっこう遠い。三陸自動車道の周囲は、山と田んぼである。夜は相当に暗い。おわかりのように、車がないと話にならない。

急がれる支援物資

■日用雑貨・食料品は切実。自転車・毛布も必要

仮設住宅の子どもたち

前述したように、現地は店が極端に少ない。消耗品の日用雑貨と野菜・穀物類などの食料品が不足している。加えて、自転車と毛布が求められる。布団もこれからは切実性を帯びると思われる。仮設住宅は、自給自足が原則とされる。しかし、着の身着のままで避難しており、被災しているから、財産も失っている。そのうえ、職もない。支援物資が頼りとなる。
衣類は、新品でなくても、自分の好みに合えば歓迎される。ただし、大きさが合わないと困るので、なかなか衣類は難しいところである。女性の衣類は倉庫のなかに相当、残っていた。

■共産党のボランティアセンターは12月10日まで

石巻市に設けられた共産党のボランティアセンターは、12月10日で閉鎖を予定している。再開は、春を迎えてからとなる。冬は道路が凍結し、危険性を伴うというのが理由。宿泊場所も朝夕の寒さが厳しくなり、受け入れ体制も難しくなるのである。支援物資は12月10日までに届けることが必要となる。晩秋が近くなり、支援が急がれる。震災が起きた時と同じように、雪がチラつく季節を迎える時が一日一日と迫っている。

以上。